

構成要素の意味はいかに放棄されるか：サンスクリット文法学における統合形の意味論的アスペクトに関して(1)

宮本, 均

<https://doi.org/10.15017/2328453>

出版情報：哲學年報. 55, pp.33-56, 1996-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

構成要素の意味はいかに放棄されるか

— サンスクリット文法学における統合形の
意味論的アスペクトに関して(1)

宮 本 均

1. はじめに

「犬の小屋」と「犬小屋」という二つの表現を比べて欲しい。この二つが同じ意味であるということにすぐに異を唱える者はおるまい。しかし、この二つの表現の間には、意味論的な差異があるように思われる。

この二つはそれぞれ、「XのY」、「XY」と構造分析できる。この二つが同値であるということは、「XのY=XY」と表現できる。しかし、例えば「犬の犬小屋」という表現を考えてみて欲しい。この表現はいささか不自然なものだが、不可能なものではあるまい。この表現は、「XのY」における「Y」が「XY」と交換可能であることを示している。しかし、「XのY」における「X」と「XY」とが交換不可能であることは、「犬小屋の小屋」という表現を考えてみれば明白であろう。同値である二つの表現「XのY」、「XY」の前者が、後者を、それも「XのXY」という形でのみ含みうるということは、考察に値する問題であるように思われる。つまり、「XのY」における「Y」と「XY」とが交換可能であるならば、「XY」におけるXという要素は一体いかなる役割を果たしているのかという問題である。

インドの文法学者は、文からの複合語派生に関する考察の中で、早い時期からこれに類する問題を扱っている。パーニニ（紀元前5世紀）の文法では、例えば複合語 [rājapuruṣaḥ]（王の家臣）は同値である文 [rājñaḥ puruṣaḥ] から派生するとされる⁽¹⁾。彼は、文典 *Aṣṭādhyāyī* における文法規則の一つ、P 2.1.1

{samarthaḥ padavidhiḥ (語に関する規則は、意味上の関係に依存する)によって、複合語 (samāsa) 等の統合形 (vṛtti) の派生を条件付けている。パタンジャリ (紀元前2世紀) は、この規則に対する長大な註釈 (MBh on P2.1.1) の中で、規則中の「意味上の関係 (samartha)」という語が具体的に何を指すのかについて三つを挙げる。それら三つ、すなわち、「意味の統合 (ekārthībhāva)」、 「相互依存 (vyapekṣā)」、 「差異化 (bheda)・関連付け (saṃsarga)」のうち、複合語に関するものは「意味の統合」である。P2.1.1は複合語派生を規定する規則に対して働くメタ規則であるから、具体的な派生規則に従って形成された複合語は単一不可分の意味を持つものとされる。「犬小屋」はまさに犬小屋のみを意味するのである。

文 {rājñah puruṣaḥ} においては、語 {rājñah}, {puruṣaḥ} は共に意味を持ち、相互に依存しあう⁽²⁾。であるから、この表現がなされた時には、当然、王 (rājan) もまた我々の理解の対象となる。ならば、単一の意味を持つものとされる複合語 {rājapuruṣa} 中の構成要素、すなわち従属要素 (upasarjana) である {rājan} と主要素 (pradhāna) である {puruṣa} の、複合語における意味のあり方についてはどうであろうか。

パタンジャリは、統合形について二つの意味論的アスペクトを挙げる。その二つとは、<jahatsvārthā vṛttiḥ> (従属要素が自らの意味を捨てている統合形) と <ajahatsvārthā vṛttiḥ> (従属要素が自らの意味を捨てていない統合形) である。「犬小屋」における「犬」は意味をなさないとするのが前者、意味を持つとするのが後者である。本稿で扱うのは、そのうちの<jahatsvārthā vṛttiḥ>である⁽³⁾。

パーニニ文法学派において、単一不可分な言語単位は文 (vākya) である。下位の言語単位、語 (pada)、そして語を構成する、語幹 (prātipadika)、動詞語根 (dhātu)、格語尾 (sup)、動詞活用語尾 (tiñ) 等は、分析的説明のために仮構されたものにすぎない。文から統合形が作られるという考えもまた、同様なのである。

バルトリハリ (5世紀) は、VP.VSk.94 及び k.96ab において、次のよう

に述べている⁽⁴⁾。

無知な者 (abudha) 達に対して [文から] 作られた統合形を説明している者達は, [統合形が] 他の意味を示す時に, [従属要素の意味の] 放棄 (tyāga) と [統合形に対する別の意味の] 付加 (abhyuccaya) という性質を持つ, と述べた。

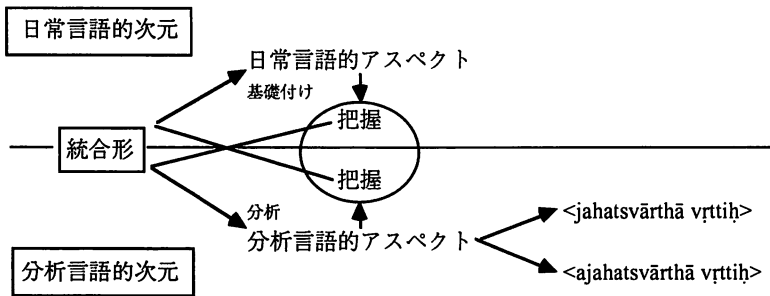
その集合体は単一のものであり, [構成要素の弁別による] 多様性 (nānātva) [の想定] は [説明のための] 方法にすぎない。

統合形を文から派生したものであるとするのは, 無知な者を教示するためという立場からである。我々は普通, 「犬小屋」という語が「犬の小屋」という文から派生したなどと考えはしない。「犬小屋」と聞いて犬小屋を理解する際, 無意識のうちに「犬 (の) 小屋」というような関係の内在を了解しているはずである⁽⁵⁾。日常言語においては「Xの小屋」という表現全てが「X小屋」と呼ばれるわけではない⁽⁶⁾。Xが「犬」, 「牛」, 「兎」などなら問題はないが, 「アングル・トム」だったらどうか。しかも, 「X小屋」という表現の全てが, 「Xの小屋」と分析できるとも限らないのである。例えば, 「丸太小屋」は「丸太 (でできた) 小屋」であり, 「山小屋」は「山 (における) 小屋」である。つまり, 派生や要素分析は, 全て我々の日常用法における理解を前提としたものであると言えよう⁽⁷⁾。しかし, そのような理解が不可能な者, 例えば, 「犬小屋」を, 「犬 (でできた) 小屋」と理解したり, 「犬 (における) 小屋」と理解する者がいないとは限らない。そのような者に対しては, 「犬の小屋」から「犬小屋」が派生したと説明する必要があるだろう。

VPの第3章「単語篇」(padakāṇḍa) に対する注釈 PP を著したヘーラーラージャ (10世紀) の見解を敷衍すると次のようになる。文を, それを構成する有意味単位としての語に分割するという方法は確かにある。一方, 統合形の場合, 限定された単一の意味が明知されるから, 本来は不可分であるはずである。し

かし、ここで取られている立場は、統合形を文から派生したものと見なすものであるから、元の文の中の語の意味によって、統合形を本来は存在しない従属要素、主要素という構成要素ごとに弁別することもできる。見方を変えるならば、この方法を用いるからこそ、従属要素の意味放棄という考えも可能になり、<jahatsvārthā vṛttiḥ>を想定することができるのである⁽⁸⁾。

以上のことを簡単にまとめると、次のように図式化することができる。



つまり、<jahatsvārthā vṛttiḥ>は、日常言語的側面把握に何らかの問題のある人々に対する説明のために用いられる分析言語的側面の一形態にすぎない。以下我々が具体的に検討を加えてゆく議論は全て、文と統合形との間の関係を前提とした分析的な意味論の枠内にある。

本稿の目的は、こうした前提に基づいて展開される議論の進展を追うことにより、統合形の意味論的側面把握がいかになされてきたかについて検討を加えることにある。

2. 統合形の意味論的側面としての <jahatsvārthā vṛttiḥ>

パーニニ文法学派が統合形に対して与えた実質的な定義はどのようなものなのか、そして、その性質として何が考えられていたのであろうか。先に引用した VP.VSk. 94 において述べられているのは、この問題である。

バルトリハリは、パタンジャリの「他の意味を表示するもの (parārthābhi-

dhāna) が統合形である⁽⁹⁾」という定義に従っている。ならば、他の意味の表示とはいかなるものなのか。ヘーララージャは次のように述べている。物が作られる時の原因 (karaṇa) と作られた物である結果 (kārya) を見ると、その結果には付加的な (adhika) 作用 (arthakriyā) が見られる。統合形についても同様であり、他の意味を表示するという結果は、原因である文中の語の意味の二次的付加物 (ādhikya) である⁽¹⁰⁾。

そのような、他の意味を示す統合形のあり方の一つとして、パタンジャリは <jahatsvārthā vṛttiḥ> を挙げるのである⁽¹¹⁾。ならば、自らの意味を捨てているものとは何か。それは主要素なのか、従属要素なのか、それとも統合形全体であろうか。

ヘーララージャは、「自らの意味の放棄」ということを理解するための例を三つ挙げるが、ここでは、パタンジャリによって最初に用いられた⁽¹²⁾三番目の例について見てみる。王に命じられた仕事に就いている大工は、彼本来の仕事である大工仕事を放棄している。それと同様に、主要素の意味を示す従属要素は自らの意味を失うのである。ヘーララージャはそれに加え、時間的な順序を明確にする。大工は、王に命じられた伝令や倉庫番といった仕事に就く前に、大工仕事をまずやめる。それと同様に、従属要素が主要素の意味を表示する前には、既に自らの意味は放棄されているのである⁽¹³⁾。

従属要素の自らの意味とは、文の状態において持っていた意味であり、文から統合形が派生するに伴って意味の放棄が起こる。従属要素の意味が放棄されて初めて、付加的なものとして主要素の意味が表示される。バルトリハリが VSk. 94 において挙げた放棄と付加の二つは⁽¹⁴⁾、このように、意味放棄の過程において関りを持つのである。

次に、ヘーララージャ以降の文法学者、特に MBh に対する複註 Pradīpa を著したカイヤタ (11世紀) と、Pradīpa に対する複々註 Uddyota を著したナーゲーシャ (18世紀) の見解について見てみることにする。

カイヤタの Pradīpa が、バルトリハリの Mahābhāṣyāḍīpikā やヘーララージャの PP に多くを負っていることは既に指摘されている⁽¹⁵⁾。しかし、カイヤタは、

文と統合形の間を明言しない⁽¹⁶⁾。統合形の定義としての他の意味の表示については、従属要素 {rājan} が主要素 {puruṣa} の意味を示すと言われるだけであるし、<jahatsvārthā vṛttiḥ>説の提示に関しても、自らの意味を捨てず、その意味を示すものは、他の意味を受け入れられないと述べるにとどまっている⁽¹⁷⁾。

他の意味の表示、すなわち、従属要素が主要素の意味を示すという点に関し、ナーゲーシャとカイヤタの言明の仕方は異なる。ナーゲーシャは、統合形中の言葉以外の働きに基づく語意の表示を、統合形の用法に有益な意味関係として挙げている。ここには、派生の際に省略された接辞の示す要素間の関係への着目がある。これは文を考慮に入れていることの明言と言ってよかろう。この点では、直接の註釈の相手であるカイヤタ⁽¹⁸⁾よりは、ヘーララージャに近い。{rājapuruṣaḥ} と言われた時、限定された {puruṣa} の意味が想起されるのと同時に、{rājan} が理解されるのである⁽¹⁹⁾。

<jahatsvārthā vṛttiḥ>説の提示に関しては、まず、自らの意味を想起させることに依拠する従属要素が、主要素の限定者であることはできない、と言われる。そして、主要素が従属要素に対する限定者であることも、明言されている⁽²⁰⁾。

さらに、彼は、新論理学派の関係概念⁽²¹⁾を用いた語意表示メカニズムに従って、この従属要素の意味放棄を説明しようと試みている。以下、彼の見解⁽²²⁾をまとめてみたい。彼によれば、諸々の語が表意力 (śakti) を持つのは、語それぞれの持つ対象性 (viśayatā) に限定された場合である。対象性とは、語等の対象 (viśaya) と認識等の対象を持つもの (viśayin) の間の関係を示す関係概念⁽²³⁾であり、認識等が対象の中に対象性として存在するとされる。つまり、ここでは人間の理解・認識までが一つの関係項とされているのである。語が対象性によって限定されるとは、語が認識対象とされることを示していると言ってよい。我々が語から受ける認識は、そうした対象性によって制限されたものである。

ならば、具体的にはどうなのか。対象性の下には、認識を構成する被限定者

(主辞：viśeṣya), 限定者(賓辞：viśeṣaṇa, あるいは prakāra), 関連 (saṃsarga) の三者が含まれる。つまり、対象性は、被限定者性 (viśeṣyatā), 賓辞性 (prakāratā), 関連性 (saṃsargatā) の三要素を持つのである。[rājan] という語は、王性(王であること)の中にある賓辞性によって相関的に表される被限定者性によって限定を受ける。対象性によって制限された時に語は表意力を持つのであるから、こうして [rājan] という語は「王」という意味を表しうることとなる。それゆえ、この被限定者性を捨ててしまえば、同時に意味を放棄したことになるのである。そして、統合形は部分の表意力に助けられた集合体の表意力によって、限定された一つの物を想起させるのである。認識の対象である統合形のアスペクトの中に、既に認識との関係が取り込まれている。このことが、ナーゲーシャの見解の独自性であろう。

以上、統合形の分析言語的アスペクトとしての <jahatsvārhā vṛttiḥ> について、各文法学者の見解をまとめてみた。限定者である従属要素・被限定者である主要素という要素弁別、従属要素の意味の放棄という二点から、<jahatsvārhā vṛttiḥ> がどのような意味論的アスペクトで把握されるかについては、次節以下で論じてゆく。

3. <jahatsvārhā vṛttiḥ> の意味論的アスペクト

<jahatsvārhā vṛttiḥ> においては若干の解決すべき問題が残る。[rājapurūṣaḥ] という統合形において [rājan] の意味が放棄されるなら、[rājapurūṣam ānaya] (王の家臣を連れてこい) と言われたとき、王の家臣であろうがなかろうが家臣なら誰でも連行されることになってしまう⁽²⁴⁾ という反論 [反論1] がありうる。また、意味が放棄されるのならば、何のために従属要素は使用されるのか⁽²⁵⁾ という反論 [反論2] もありうるであろう。

先述の通り、<jahatsvārhā vṛttiḥ> をめぐる議論の全ては、「文中における有意味の語」という、それ自体が分析用の道具として仮構されたものに基づいている。先に挙げた二つの反論に対し「文と統合形の間の関係」という大前提

から与えられた論駁の方法を検討することで、我々は〈jahatsvārhā vṛttiḥ〉の具体的な意味論的アスペクトを知ることができるであろう。

3.1 残存説によるアスペクト把握

バルトリハリは、VSk.95ab において、次のように述べている⁽²⁶⁾。

そ [の従属要素の意味] は残存 (anvaya⁽²⁷⁾) ゆえに理解され、あるいは、
[従属要素の中の、主要素の意味と] 相容れないものは消滅する。

まず、問題となるのは、残存ゆえの従属要素の意味理解であろう。

バルトリハリは、「残存ゆえに [従属要素は] 限定者となるであろう⁽²⁸⁾」というバタンジャリの見解に従っている。それを説明するために、ヘーララージャは、火にかけた壺の変色が火が消えた後も残るという例⁽²⁹⁾を援用し、[反論 1] に論駁を加える。壺の場合、変色している表面を見るだけで、以前火にかけられていたということを理解することができる。火が壺の表面を変色させた後で消えるように、統合形において従属要素は主要素の意味を限定した後に意味を放棄する。そして、火が消えた後も壺の表面の変色がそのまま残るように、主要素に付与された特徴（つまり、従属要素から受けた限定）は残るのである。それによって、[rājapuruṣaḥ] という統合形の場合は、従属要素 [rājan] によって限定された主要素 [puruṣa] が明知される。それゆえに、[rājapuruṣam ānaya] と言われても、家臣なら誰でも連行されるということはないのである⁽³⁰⁾。

カイヤタの説はどうだろうか。従属要素 [rājan] は主要素 [puruṣa] に特徴を付与した後に自らの意味を捨てるが、付与された特徴が消えることはないという点⁽³¹⁾、及び、[rājan] の [puruṣa] への限定が [puruṣa] への特徴付与であるとする点⁽³²⁾、どちらにもヘーララージャの見解からの発展は見られない。

一方、ナーゲーシャは、この問題について論じる際にも、やはり文との関係性を考慮に入れた解釈を行なう。従属要素は、文 [rājñāḥ puruṣaḥ] における

{puruṣa} に見られた王との関係という特徴を統合形 {rājapuruṣaḥ} 中の {puruṣa} に付与し、限定された {puruṣa} を想起の対象となした後で自身を想起させることを放棄する⁽³³⁾。{rājan} の想起がない以上、{rājan} は自らの意味を捨てていると理解されるべきなのである。

例えば、ジャスミンの葉で作られた容器 (mallikāpuṭa) は、残っている花の香りから、それがジャスミンの葉でできていると特定できる⁽³⁴⁾。{rājapuruṣaḥ} という統合形においても同様なのである。{rājan} の意味は確かに放棄されている。残っている {rājan} は、意味のない字音の並びにすぎない。しかし、それは文の状態においては意味を持ち、主要素 {puruṣa} を限定していたのである。意味こそ失えども、その残余物から我々は、{puruṣa} と {rājan} の間の限定関係を文同様に理解することができるのである⁽³⁵⁾。

次に問題になるのは、主要素の意味と相容れないものの放棄についてである。

バタンジャリは「意味は放棄されても、完全に放棄されるべきではない。他の意味と相容れない自分の意味、それを捨てるのである」と述べる⁽³⁶⁾。主要素の意味と相容れないものとして、ヘーラーージャは従属要素の意味の本性を挙げる。それは、主要素の意味を制限する敵対者 (pratidvaṃdvin) とされる⁽³⁷⁾。これは具体的には何を指すのであろうか。彼による説明は次のように要約できる。従属要素、主要素という二つの構成要素は、互いに主要性 (prādhānya) を持ちうる関係にある。しかし、<jahatsvāṛthā vṛttiḥ>においては限定された主要素の意味が明知されねばならない。そのためにこそ、従属要素の主要性が放棄されるのである⁽³⁸⁾。つまり、彼が述べる「敵対者」とは、従属要素の持つ主要性ということになる。

主要性の対概念は従属性 (guṇa) である。彼は従属要素と主要素に分けられる複合語の構成要素を、限定者である従属要素、被限定者である主要素という一面のみでとらえてはいない。従属要素にも主要性はあり、主要素にも従属性がある。そのうちの従属要素の主要性が、主要素の意味と相容れないものとして放棄されるのである。

ならば、放棄されず残るものは何であろうか。

バルトリハリは、VSk.7において、限定者・被限定者について、次のように述べている⁽³⁹⁾。

未知のものが被限定者であり、既知のものが限定者である。全ての物の補助者 (upakārin) は他者のためのものであるから、従属者 (śeṣa) である。

従属者である限定者は他のものに対する補助者である。ヘーララージャはバルトリハリのこの見解を利用する。従属要素の限定者性は、主要素の補助のためのものであり、主要素の意味と相容れないものではないから放棄されない。従属要素の限定者性までが放棄されるならば、主要素の意味を補助することは不可能となる。つまり、その使用は無意味なものとなるのである。無意味なものである前分と後分の間には、意味上の関係などありえない。P 2.1.1 が複合語派生の条件として、要素間の意味上の関係を挙げている以上、結果として、複合語自体がありえないものになってしまう⁽⁴⁰⁾。複合語は現に存在するのであるから、背理法によって従属要素の意味は無意味なものではないことになる。このようにして、[反論 2] に対する論駁がなされる。

先に挙げた大工の例にあてはめてみれば、理解は容易になるであろう。彼は王に命じられた仕事に就くために、本業である大工仕事をやめなければならない。しかし、王に命じられた仕事をしながらも、しゃっくりをすることや、身体を掻くこと等をやめることはない⁽⁴¹⁾。王に命じられた仕事を主要素、大工を従属要素とすれば、大工仕事は大工の持つ主要性であり、放棄されなければならない。大工仕事と王に命じられた仕事とは両立できないからである。しかし、しゃっくり等は、王に命じられた仕事を行う上で、何の妨げにもならない。こうしたことまで完全に放棄してしまったら、彼はもはや生きていたとは言えない。死んでしまえば、王に命じられた仕事自体できなくなってしまうのである。つまり、しゃっくり等を含めた生命活動は、暗にはあるが王に命じられた仕事を補助していると言える。こうした補助こそが、バルトリハリ、ヘーララージャの言う限定者の役割なのである。

カイヤタもまた、バルトリハリが限定者の性質として挙げた「他者の補助 (upakāra)」にはほぼ全面的に依拠している。さらに、文章において見られる相互の限定・被限定関係が統合形には見られず、限定者として他者を補助する従属要素に対する限定者として主要素が理解されることはない⁽⁴²⁾としている。しかし、この言明においても、相互の限定・被限定関係に関する記述はヘーララージャのものとは比べ明確とは言えない。

一方、ナーゲーシャはカイヤタとは異なり、新論理学派の関係概念を用い、従属要素の被限定者性が放棄される⁽⁴³⁾、と明言している。これは、2. で述べられた彼の意味放棄メカニズムから見れば当然であろう。ならば、従属要素の主要素の意味への補助として、彼は何を挙げるか。主要素は、従属要素との間を持つ関係以外に様々な関係を持ちうる。そうした関係から、主要素を区別すること、それこそを補助者としての従属要素の役割とするのである⁽⁴⁴⁾。統合形中の {rājan} が限定者であるならば、それは主要素と相容れないものではない。しかし、{rājan} の被限定者性は主要素と相容れないから被限定者性は放棄される。もし、限定者性が放棄されれば、限定された {puruṣa} の意味の想起もまたないことになってしまうのである⁽⁴⁵⁾。PP において主要性と言われていたものをはっきりと被限定者性と呼んでいる点にヘーララージャとの相違が見られると言える。

要素間の限定・被限定関係を一方的にとらえず、相互のものとするヘーララージャの見解を、カイヤタが発展的に受け継いだとは言いがたい。しかし、ナーゲーシャの、関係概念を用いた意味放棄メカニズムにかなう説明は、ヘーララージャの見解をより緻密にしたものであると言っても過言ではなからう。

以上のようにして、従属要素の中で、捨てられるべき部分と捨てられるべきではない部分との間に明確に線が引かれた。捨てられるべき部分が従属要素の主要性（あるいは、被限定者性）であり、捨てられるべきでない部分が主要素を補助する限定者性である。主要性が放棄された後も、限定者性が残存することで要素間の限定関係を理解することができるのである。つまり、<jahat-svārthā vṛttiḥ>とは、従属要素の主要性が放棄された統合形なのである⁽⁴⁶⁾。

3.2 差異化・関連付け説によるアスペクト把握

[反論1] に対しては、もう一つの論駁方法が見られる。

バルトリハリは、VSk. 96cd において、次のように述べる⁽⁴⁷⁾。

あるいは、差異化 (bheda) と関連付け (saṃsarga) の想定 (kalpanā) がある。[その想定は] 選言 (vikalpa) と連言 (abhyuccaya) の二つによる。

これは、パタンジャリの、「あるいは、この意味上の関係に関する支配規則 (samarthādhikāra) が統合形に関して効力を持つ。意味上の関係というのは、差異化、あるいは関連付けである。別の者達は [次のように] 言った。意味上の関係とは、差異化と関連付けの両方である⁽⁴⁸⁾」という見解を受けている。ヘーラージャは、差異化と関連付けが文章の意味に関するものであることをまず述べる⁽⁴⁹⁾。その上で、文から統合形が作られたとする立場から、両者を統合形にも適用するのである。そして、文章の意味を差異化、あるいは関連付け、とするのがVSk.96中の「選言」、差異化と関連付けであるとするのが「連言」である⁽⁵⁰⁾。

ならば、差異化、そして関連付けとは具体的にはどのような作用をなすのであろうか。

パタンジャリの見解⁽⁵¹⁾を敷衍してみる。{rājñah puruṣaḥ} という文の場合、{rājñah} という言語表現によって、「家臣」を含め、「妻」、「子」、「馬」などといった王の所有する全てのものの想定が可能となる。一方、{puruṣaḥ} という言語表現によって、家臣にとって主人たりうる者全ての想定が可能となる。その上で、{rājñah} は、家臣が王以外に持ちうる主人を排除し、{puruṣaḥ} は、王が持ちうる他の所有物を排除する。結果、王にとっての家臣、家臣にとっての王、という双方向からの限定がなされることとなる。統合形においてもこうした作用は同様に働くから、{rājan} の意味が放棄されていたとしても、

{puruṣaḥ} は他に持ちうる主人からは区別されているのである。それゆえに [反論 1] に言われる事態は回避されるのである。

ヘーララージャは、このパタンジャリの説明を、文章の意味が差異化である時のものとし、この時、関連付けは推定されるとした。この時、{puruṣaḥ} は「下僕 (bhṛtya)」の意味を表す。そして、引き続き、彼は文章の意味が関連付けである場合の例を挙げる。この場合、{puruṣaḥ} は「種 (jāti)」を、すなわち「家臣性 (puruṣatva)」を表す。{rājan} もまた「王性 (rājatva)」を表すのである。{rājñah puruṣaḥ} と続けて発音されることによって、王性と家臣性との間の相互の関係が理解される。つまり、家臣性が王性と関連付けられることによって、限定された意味が理解されることとなるのである。このとき、王の持つ所有者性は既に家臣性以外との関連を持っている。同様に、家臣の持つ所有物性もまた、王性以外との関連を持っている。従って、王性と家臣性との間に関連付けがなされた後でも、そうした他のものとの関連は排除されねばならない。それゆえに差異化が推定されるのである⁽⁵²⁾。

カイヤタはここでもやはり文との関りに触れない。ヘーララージャは差異化・関連付けを文の意味 (vākyaṛtha) と明言しているが、カイヤタはこの二つを意味上の関係 (sāmarthyā) の本性と述べるのみである⁽⁵³⁾。

具体的な部分ではどうだろうか。{rājñah} という表現で全ての所有物が想定されるのはパタンジャリも述べた通りである。しかし、カイヤタは、{puruṣaḥ} という表現からすぐに全ての所有者が想定されるとは述べていない。彼は、第一格格語尾は他との関係を示すものではないから、関係が他の手段によって知られねばならないと述べている⁽⁵⁴⁾。彼がもし相互の限定・被限定関係を考慮していたとするならば、敢えてこのように断ることはおかしいように思われる。

意味上の関係が差異化である時、{rājan} は家臣を他の所有者から引き離れた後、自らの意味を捨てる。しかし、{puruṣaḥ} は自らの意味を捨てずとも王を他の所有物から引き離す。特定の所有物を自分以外の所有者から引き離れた時、従属要素は「為すべきことを為したもの (kṛtakārya)」と言われる。為す

べきことを為さずに意味が消滅するならば、意味上の関係がなくなり統合形は生じない⁽⁵⁵⁾。ただし、関連付けの場合については、ヘーラーラージャが「種 (jāti)」の意味で {puruṣa} が用いられている時の例を挙げているのに対し、カイヤタは関連付けが意味上の関係である時も同様であると述べるにとどまっている。

ナーゲーシャの見解はどうか。残存説によるアスペクト把握においては、{puruṣa} という言葉が {rājan} との結合関係を持つものとして想起される。それとは異なり、差異化ゆえの理解においては、{puruṣa} という語から家臣としてのみ特定の家臣が想起されるのである⁽⁵⁶⁾。だが、ここで限定・被限定関係が無視されているわけではない。Uddyota の先立つ箇所では、限定者について、特定するもの (viśeṣaka), あるいは、他から区別するもの (itaravyāvarttaka) であると述べている⁽⁵⁷⁾。他の所有者からの、そして、他の所有物からの引き離しは、双方の限定者性に基づいて行われるのである。そして、従属要素 {rājan} はあくまで暗示性 (dyotakatā) によって意味を達成するのであって、決して想起されることはないのである⁽⁵⁸⁾。

文においては、差異化と関連付けは不可分のものである⁽⁵⁹⁾。例えば、{rājñah puruṣo'śvas ca} (王の家臣と馬) というような場合、所有物性と同一基体性を持つもの (この場合の puruṣa と aśva) は、{rājan} によって引き離された他の全ての所有物との差異を等しく持ち、そして、所有物性と同一基体性を持つもの全てが {rājan} との関連を等しく持つ⁽⁶⁰⁾。一方、統合形においては、主要素が、{rājan} と関係を持つ個物に存在する関係を想起させる。そして、その主要素は、他の全ての所有者との差異を等しく持つ。このようにして、差異化と関連付けによって特定された {puruṣa} のみが我々に想起されるのである。

こうした差異化の対象となる他の所有者、他の所有物というのは、あくまで差異化の過程において仮想され、その上で切り捨てられるものにすぎない。つまり、差異化による理解は、言語表現されたもの以外のものに依存することになる。それゆえに、この差異化は言葉による理解の対象とはされない。このこ

とは差異化と不可分のものである関連付けについても同様にあてはまるのである⁽⁶¹⁾。こうしたことを明言しているのはナーゲーシャだけであるが、語と認識との間の関係概念を言語認識の説明手段として用いる彼の体系から見れば、当然明言されるべきことなのである。

4. 結 び

以上、<jahatsvārthā vṛttiḥ>についての文法学者達の議論に、検討を加えてきた。

元来、P 2.1.1 は、複合語派生を規定する諸規則が統辞論のみに従い無制限に適用されることがないように、意味論的な適用条件を定めたメタ規則である。P 2.1.1 から生じる意味論的な議論は、あくまで統合形「XY」を構成する要素X、Yの間の意味上の問題であり、統辞論的な側面を持っているのである。そのことは、パタンジャリ、ヘーララージャ、カイヤタの展開する議論においても、「限定者としての従属要素・被限定者としての主要素」という用語法からうかがい知ることができる。「限定者・被限定者の間の限定関係」というのは、意味論の立場からの発言である。しかし、それを前提とする限り従属要素・主要素にはいかなる語もあてはまりうるという観点から見れば、統辞論的でもある。カイヤタに至るまでの議論の発展において、従属要素X、主要素Yからなる統合形 XY が<jahatsvārthā vṛttiḥ>というアスペクトで理解されるための意味論的な条件は明確にされた。我々は、そうして確立されたアスペクトのもとに統合形を把握することができるのである。

しかし、ヘーララージャからナーゲーシャへの発展の流れ⁽⁶²⁾において、事情は大きく変わっている。ナーゲーシャは、新論理学派の関係概念をアスペクト説明に取り込むことで、従属要素と主要素との関係のみならず、人間の認識・理解をも一つの関係項としている。ここでは、要素の側の条件は、即そのアスペクト認識が生じるための条件となる。統辞論的な側面が透徹されたことで、説明の手段としては、非常に緻密なメカニズムになったと言えるだろう。

しかし、同時に、我々は能動的な立場から離され、受動的な位置にとどめられてしまったのではなかろうか⁽⁶³⁾。統辞論的な意味論が発展するに従って、日常言語的アスペクトからは最も遠い地点にたどり着いてしまったと筆者は考える。

確かに、無知な者が分析言語的アスペクトの把握に長じることはできるかもしれない。しかし、そのことが日常言語的アスペクトを獲得することにつながるのか。文法的な知識が増えるにつれ、日常言語の次元から遠く隔たってゆき、再び交わることはついにないのではなかろうか。〈jahatsvārthā vṛtṭiḥ〉説の発展に伴い、人は日常言語の次元から遠く引き離され、分析的言語の次元の中で一関係項としての位置に置かれた。それとは対称的に、「犬小屋」には、捨てられたはずの犬の影が必ず付きまとうのである。

[文献及び略号]

MBh: *Vyākaraṇamahābhāṣya* of Patañjali

(1) ed. by F. Kielhorn. rev. by K. V. Abhyankar, 3 vols., Poona, 1962, 65, 72.

(2) ed. with the commentary *Bhāṣyapradīpa* of Kaiyaṭa & supercommentary *Bhāṣyapradīpoddyota* of Nāgeśa Bhaṭṭa, ed. by M. M. Pandit Shivadatta Sharma, 6 vols., reprint ed., Delhi, 1988.

P: *Aṣṭādhyāyī* of Pāṇini

ed. and English translation by Smitra M. Katre, Delhi-Varanasi-Patna-Bangalore-Madras, 1989.

Pradīpa: *Mahābhāṣyapradīpa* of Kaiyaṭa (see MBh (2))

Uddyota: *Mahābhāṣyapradīpoddyota* of Nāgeśa Bhaṭṭa (see MBh (2))

VP: *Vākyapadīya* of Bhartrhari

(1) ed. by W. Rau, *Bhartrharis Vākyapadīya: Die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda Index versehen*. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlands XLII. 4., Wiesbaden, 1977.

(2) ed. with the commentary *Prakīrṇaparakāśa* of Helarāja, ed. by K. A. Subramania Iyer, *Kāṇḍa* III, part II, Poona, 1973.

(3) ed. with the *Ṭīkā* of Puṅyarāja and the *Ancient Vṛtti*, ed. by K. A. Subramania Iyer, *Kāṇḍa* II, Delhi-Varanasi-Patna, 1983.

VS: *Vṛttisamuddēśa* of Bhartrhari (see VP (1) (2))

PP: *Prakīraṇaprakāśa* of Helarāja (see VP (2))

VSLM: *Vaiyākaraṇasiddhāntalaghumanjūsā* of Nāgeśa Bhaṭṭa

ed. by Madhava Sastri Bhandari, Chowkanba Sanskrit Series 44, Benares, 1925.

Cardona [1967-68]: G. Cardona, Anvaya and Vyatireka in Indian Grammar, *Adyar Library Bulletin* 31-32, pp.313-352.

Cardona [1976]: G. Cardona, *Pāṇini. A Survey of Research*, Hauge-Paris.

Ingalls [1951]: Daniel H. H. Ingalls, *Materials for the Study of Navya-Nyāya Logic*, Harvard Oriental Series vol. 40, Cambridge (Massachusetts).

Iyer [1969]: K. A. Subramania Iyer, *Bhartrhari. A study of the Vākyapadīya in the light of the Ancient Commentaries*. Poona.

Iyer [1974]: K. A. Subramania Iyer, *The Vākyapadīya of Bhartrhari* Chapter III, pt. II. English Translation with Exegetical Notes, Delhi.

Joshi [1968]: S. D. Joshi, *Patañjali's Vyākara-Mahābhāṣya Samarthāhnikā (P2.1.1)*, Poona.

Renou [1957]: L. Renou, *Terminologie grammaticale du sanskrit*, Paris.

Ruegg [1959]: D. S. Ruegg, *Contributions à l'histoire de la philologie linguistique indienne*, Publications de l'institut de Civilisation Indienne fascicule 7, Paris.

宇野 [1977]: 宇野惇, 「新正理学の術語(1)」, 『広島大学文学部紀要』 37, pp.85-105.

宇野 [1978]: 宇野惇, 「新正理学の術語(2)」, 『広島大学文学部紀要』 38, pp.89-109.

宇野 [1979]: 宇野惇, 「新正理学の術語(3)」, 『広島大学文学部紀要』 39, pp.41-62.

小川 [1986]: 小川英世, 「Kaundabhaṭṭa の bhāvapratyaya 論」, 『広島大学文学部紀要』 45, pp. 94-118.

小川 [1991]: 小川英世, 「パーニニ文法学派における文の意味」, 『前田惠學博士頌壽記念佛教文化學論集』, 山喜房仏書林, pp. 543 (238)-562 (219).

川上 [1994]: 川上真一, 「クマーララの文意論」, 『南都佛教』 第六十八號, 南都佛教研究会. PP.57-82.

中村 [1956]: 中村元, 『ことばの形而上学』, 岩波書店.

(1) 具体的には、次の過程を経る。複合語形成を規定する P2. 2. 8 [ṣaṣṭhi] (第六格格語尾で終わるものは [格語尾で終わるものと任意に複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる]) を適用することで語複合が準備され、P2. 4. 71 [supo dhātuprātipadikayoḥ] (動詞語根と語幹 (prātipadika) の一部をなすもの) に対し、格語尾 (sup) の [ゼロ置がある]) によって、格語尾が省略される。さらに、P8. 2. 7 [nalopaḥ prātipadikāntasya] (語幹の末尾に対して、n 音の [ゼロ置がある]) によって、語幹 [rājan] の末尾の n が省略される。結果、最終的に [rājapuruṣa] という複合語が得られる。

(2) 文もまた単一の意味を持つことには変わらない。その場合は、文を構成する語それぞれの意味が相互依存の関係にあり、結果、文として単一の意味が表示される。cf. 小川 [1991: 545 (236)].

- (3) 本稿で扱った諸テキストにおける<jahatsvārthā vṛtṭiḥ/ ajahatsvārthā vṛtṭiḥ> についての議論は、その大部分が<jahatsvārthā vṛtṭiḥ>に関するものである。しかも、その議論は<ajahatsvārthā vṛtṭiḥ>に関するものよりも多岐にわたり、複雑である。<ajahatsvārthā vṛtṭiḥ>の意味論的アスペクトに関しては、別稿を準備しているので、そちらを参照されたい。
- (4) VP. VSk. 94 (VP (1) では95): abudhān prati vṛtṭim ca vartayantaḥ prakalpitām / āhuḥ parārthavacane tyāgābhyuccayadharmatām//
VP. VSk. 96 (VP (1) では97) ab: upāyamatraṃ nānātvaṃ samūhas tv eka eva saḥ/
- (5) 「犬小屋」を「犬(の)小屋」というように関係を内在させる形で表記すること自体、分析的思考のなせるわざである。名詞語幹としての統合形に要素間の関係を内在させる見方については、小川 [1986] を参照せよ。
- (6) サンスクリット文法においては、要素間に意味上の関係さえあれば、P2. 2. 8 によって複合語形成は可能となる。しかし、日常言語の基礎付けのためというパーニニ文法の性格を考えてみてほしい。日常言語における「XY」という表現が「XのY」と要素分析されたのである。このような分析の結果生じた「XのY」という表現こそが「XY」と統合されるべきものではなからうか。
- (7) パーニニ文法学は、たとえ規則にかなわぬ語形であっても、それが日常用法として用いられているものであれば例外として認めるという性格を持つ。
- (8) PP on VSk. 96 (p. 199, ll.21-23): vākye vicchedopakramārthābhīdhānam, vṛtttau tu viśiṣṭo' rtho' bhedenā pratiyata iti niraṃśam eva paramārthato vṛtṭipadam/upāyamātrā tu vākyagatapadārthabhedena vyutpādanam iti prādhānyasya tyāgāj jahatsvārthatābhanitih/
- (9) MBh on P2.1.1 (p. 328, a, l.14, p 328, a, l.41): atha ye vṛtṭim vartayanti, kim ta āhuḥ? / parārthābhīdhānam vṛtṭir ity āhuḥ/
- (10) PP on VSk. 94 (p. 197, ll.1-3): tatra kāraṇāt kāryam adhi-kārthakriyākāri drṣṭam paṭādi/ evam iha api vṛtṭilakṣaṇasya kāryasya vākyagatapadārthādhikyaṃ nyāyāyā iti parārthābhīdhānam vṛtṭilakṣaṇam ārabhyate/
- (11) MBh on P2.1.1 (p. 329, a, l.5): jahatsvārthā/
- (12) MBh on P2.1.1 (p. 329, a, ll.20-24): evaṃ hi drṣyate loke puruṣo' yam parakarmani pravartamānaḥ svaṃ karma jahāti/ tad yathā takṣā rājakarmani pravartamānaḥ svaṃ takṣakarma jahāti/ evaṃ yuktaṃ yad rājā puruṣārthe vartamānaḥ svaṃ arthaṃ jahyād/
- (13) PP on VSk. 94 (p. 197, ll.19-21): kośasamāharaṇasannidhānādaḥ rājakarmani vyāpriyamāṇas takṣā svaṃ dāruccchedacaturaśrikaraṇādīvyāpāraṃ jahāti/ svavyāpārāparityāge rājakarmano' nuṣṭhātum āsakyatvāt/ evaṃ svārthānupādānena padāntarārthopādānam upasarjanānām vṛtṭtau nyāyāyā anena nidarśanena/
- (14) この二つは、ヘーララージャによって、統合形が統合形であるための性質、統

- 合形の本質であるとされている。cf. PP on VSk. 94 (p. 198, l.9): tad evaṃ tyāgāś ca abhyuccayaś ca yo dharmāḥ svabhāvo' syā vṛtṭeḥ tadbhāvas tattā, tām āhuḥ/
- (15) cf. 中村 [1956:13], Iyer [1969:40], Cardona [1976:244]. なお、本稿で扱う範囲における、Mahābhāṣyadīpikā と Pradīpa, そして、Mahābhāṣyadīpikā と PP の関係については、MBh on P2.1.1 (samarthāhnikā) に対する Mahābhāṣyadīpikā が現存しないため確認できなかった。
- (16) これは、全く考慮にいれていないということを意味しない。註(42)に挙げた部分の議論は明らかに文と統合形との関係を前提としているからである。しかし、あらゆる議論においてそのことを明言するヘーラジャに比べ、カイヤタの態度は、「無知な者への説明」としては一步後退したものであると言わざるをえない。
- (17) Pradīpa on MBh on P2.1.1 (p. 328, a, l.42-p. 328, b, l.2): parārthābhīdhānam iti/ parasya śabdasya yo'rthas tasya abhīdhānaṃ śabdāntareṇa yatra sāvṛttir ity arthaḥ/ yathā rājapuruṣa ity atra rājaśabdena vākyāvasthāyām anukṭhaḥ puruṣārtho' bhīdhīyate/
Pradīpa on MBh on P2.1.1 (p. 329, a, ll.6f): jahatsvarthā iti/ nahi svārtham ajahataḥ svena arthena vaśīkṛtasya arthāntaropādānaṃ ghaṭate/
- (18) Uddyota は Pradīpa に対する註釈だが、ナーゲシャはカイヤタの MBh 解釈を必ずしも是としない。時には、自ら MBh に対する注釈を加えることもあるのである。cf. Cardona [1976:245].
- (19) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 328, b, ll.3-8): parasya śabdasya iti/ pradhānārthakaśabdasya upasarjanaśabdasya vā ity arthaḥ/ yatra iti/ samāsādiṣu vṛttivyavahārād iti bhāvah/ evaṃ ca tanniṣṭhaśabdāntarakaraṇakapadārthābhīdhāyakatvaṃ teṣāṃ svāśrayatvena vṛttivyavahāraprayojakaṃ sāmānyam iti phalitam/ tac ca svārthaviśeṣaṇakapurūṣārthopasthitau rājapadaśaktijñānasya saha-kāritvād bodhyam/
- (20) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 329, a, ll.8-12): svena arthena vaśīkṛtasya iti/ svārthamātropasthāne vyāsaktasya ity arthaḥ/ arthāntaropādānam/ arthāntaram prati viśeṣaṇatvam/ yadva' rthāntarasya svaṃ prati viśeṣyatvena upādānam/ na ca pṛthagupasthitayoḥ paścād anvayaḥ, saṃbandhabodhakavibhaktiyabhāvād/ abhedānvayas tu bādhita eva anubhavabādhitaś ca ity abhimānaḥ/
- (21) ナーゲシャへの新論理学派の影響については、Ruegg [1959] を、新論理学派の関係概念に関しては、Ingalls [1951], 宇野 [1977, 78, 79] を参照した。
- (22) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p.329, b, ll.23-27): atra ayaṃ bhāvah padānām tattadviśayatāviśiṣṭe' rthe śaktiḥ/ ata eva bodhe viśayatānyamaḥ/ evaṃ ca rājapadāde rājavāniṣṭhaprakāratānirūpitaviśeṣyatvāvaccinnaṃ svārthas tatra samāse viśeṣyatvāṃśatyāga ity etāvata jahatsvarthatvam iti/ atra ca bijaṃ samu-

dāyaśaktiḥ/ evaṃ ca avayavaśaktisahakṛtasamudāyaśaktiā viśiṣṭaikopasthitir iti tattvam/

- (23) こうした関係概念を, Ingalls [1951: 44-47] は「relational abstract」と呼んでいる。
- (24) PP on VSk. 95 (p. 198, ll.10-13): parārthābhīdhānalakṣaṇāyāṃ tasyāṃ tatra jahatsvārthāyāṃ vṛttau coditam rājapurusaṃ ānaya ity ukte purusaṃātrasya ānayanam prāpnoti, aupagavam ānaya ity ukte' ptyamātrasya iti/
イタリック体は MBh on P2.1.1 (p. 329, a, ll.31f) からの引用であることを示す。
- (25) PP on VSk. 95 (p. 198, l.13): nanu ca upasarjanapadānām arthatyāge prayogaḥ kim artha iti katham na codyate/
- (26) VP. VSk. 95 (VP (1) では96) ab: anvayād gamyate so' rtho virodhī vā nivartate/
- (27) anvaya という語が一般にどういう意味で用いられるかに関して, Cardona [1967-68: 334f] は MBh on P1.3.1 における議論を例証に引き, 「残存」を挙げる。{|vrkṣaḥ} と言われる時, 名詞語幹 {|vrkṣa} が, 幹, 枝, 葉等を持つもの, すなわち「木」の意味を示し, 第一格単数格語尾 |as} が単数性を示す。{|vrkṣau} と言われる時, 単数格語尾の代わりに両数格語尾が用いられるが, それによって単数性が消え, 新たに両数性が生じるが, 名詞語幹の示す意味は「残存するもの (anvayin)」とされるのである。
なお, Iyer [1974:170] は, VSk. 95 中の anvayād を, “because its traces persist” と訳している。一方, Renou [1957: 43] はこの語に, “présence continuée” という訳語を与えている。
- (28) MBh on P2.1.1 (p. 329, b, l.29): atha vā' nvayād viśeṣaṇaṃ bhaviṣyati/
- (29) PP on VSk. 94 (p. 197, ll.14-16): yathā hy agnisamyogaḥ pākajān viśeṣaṇān utpādya paramāṇuṣu nivartate tathā upasarjanārthaḥ pradhāne viśeṣam ādhāya tāvanmātraprayojanatvān nivartate/
この例は, ヘーラーラージャが <jahatsvārthā vṛttiḥ> 説を提示した際に挙げた三つの例のうち二番目のものである。
Joshi [1968: 79, Note (70)] は, カイヤタがこの例を用いている部分を挙げ, 「カイヤタ独自の例」と述べているが, 見ての通りヘーラーラージャに依拠したものであることは間違いないだろう。
- (30) PP on VSk: 95 (p. 198, ll.21-23): uktam etad agnisamyogāhitā viśeṣāḥ paramāṇūnāṃ nivṛtte' py agnisamyoge' nuvartanta iti/ evam upasarjanapadārthaḥ pradhānārthaṃ viśeṣya nivartata iti tadāhitaviśeṣānugamād viśiṣṭaḥ puruṣaḥ pratīyate, na puruṣamātram/
- (31) Pradīpa on MBh on P2.1.1 (p. 329, b, ll.32-34): anvayād iti/ rājaśabdaḥ svārthanimittaṃ puruṣārthe viśeṣam ādhāya svārthaṃ jahāti, na ca tannimittaṃ viśe-

- ṣadarsanam nivartate puruṣe/
- (32) Pradīpa on MBh on P2.1.1 (p. 329, b, ll. 35f): viśeṣaṇam iti/ viśeṣaḥ puruṣagato bhaviṣyati ity arthaḥ/
- (33) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 329, b, l. 39-p. 330, a, l. 3): vākyadr̥ṣṭasvajanyo-pasthitiviśayārthanimitam viśeṣam rājasambandharūpaṁ puruṣapadajopasthiti- viśaye puruṣe ādhāya puruṣam tadvaiśiṣṭyena puruṣapadena upasthitiviśayam kṛtvā svārtham tasya svārthatvam svajanyopasthitiviśayatvam jahāti tadvā- kyaṇiṣṭannavṛttāv ity arthaḥ/ ayam hi vākyād vṛtter niṣpattiṁ manyate/
- (34) MBh on P2.1.1 (p. 330, a, ll. 15-17): yathā tarhi mallikāpuṭaś campakapuṭa iti/ niṣkīrṇāsv api sumanaḥsu anvayād viśeṣaṇam bhavati ayam mjaallikāpuṭaḥ, ayam campakapuṭa iti/ PP on VSk. 95 (p. 198, l. 24): kusumasamparkopahitagandhaviśeṣānuvṛtter apānita- kusumo' pi puṭas tadvyapadeśyaḥ/
- (35) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 330, a, ll. 20-24): yathā puṣpāṇām abhāve' pi gandhānvayamātreṇa pūrvatanīm puṣpasattām anumāya mallikāpuṭa ityādivya- vahāras tathā vṛttau rājapadasya arthābhāve' pi vākyadr̥ṣṭasārthakarājasabda- varṇānupūrvīsattvamātreṇa vākye yathā rājasambandhavataḥ puruṣasya eva prati- tis tathā iha api rājasambandhavataḥ puruṣasya eva puruṣapadāt pratitir ity arthaḥ/ VSLM (p. 1401, ll. 6-10): vṛttau rājapadasambandhamātreṇa puruṣapadam eva rā- jasambandhipuruṣabodhakam āmodānvayam ādāya campakapuṭa ityādivyavahāravād rājapadārthaḥ puruṣaviśeṣaṇam ityādivyavahāraḥ/
- (36) MBh on P2.1.1 (p. 329, a, ll. 34f): jahad apy asau svārtham na atyantāya jahāti, yaḥ parārthavirodhī svārthas taṁ jahāti/
- (37) PP on VSk. 95 (p. 198, l. 26-p. 199, l. 1): pradhānārthāvaccchedapratidvamdvī svabhāvo' paity upasarjanārthasya/
- (38) PP on VSk. 95 (p. 199, ll. 1-3): dvayor hi prādhānye parasparasambandhābhāvād viśiṣṭo' vacchinnaḥ pradhānārtho na pratīyeta iti svaprādhānyam upa- sarjanasya nivartate/
- (39) VP. VSk. 7: viśeṣyam syād anirjñātam nirjñātārtho viśeṣaṇam/parārthatvena śeṣatvam sarveṣām upakāriṇām// (VP (1) 𑖀 b-pāda 𑖀 nirjñāto' rtho viśe- ṣaṇam)
- (40) PP on VSk. 95 (p. 199, ll. 3-8): pradhānopakārāya tu yad rūpaṁ viśeṣaṇa- tātmakam tan na apaity avirodhād iti na atyantāya jahāti ity uktaḥ/ sarvathā hi svārthaparityāge svapadārthena pradhānopakārābhāvād upasarjanapadam sva- rūpam eva jahyāt/ paropakāraprabhāvitam hy upasarjanam/ asati ca paropakāre prayogavaiyarthyam, uttarapadād eva pradhānārthapratiteḥ, anarthakasya ca

apareṇa sambandhābhāvāt sāmārthyanibandhanā samāsasamjñā na syād iti na sakalārthaparityāgaḥ/

- (41) MBh on P2.1.1 (p. 329, a, ll.35-38): tad yathā takṣā rājakarmaṇi pravartamaṇaḥ svaṃ takṣakarma jahāti, na tu hikkitaśvasitakaṇḍūyitāni/ na ca ayam arthaḥ parārthavirodhī viśeṣaṇaṃ nāma/ tasmāt tan na hāsyati/
PP on VSk. 95 (p. 199, ll.8f): takṣā' pi hikkitahasitādīni prāṇitvāvyabhicārīṇi rājakarmaṇy anuḡāni na jahāti/
- (42) Pradīpa on MBh on P2.1.1 (p. 329, b, ll.5-7): vākye svaviśeṣaṇasambandhapratipattau sāmārthyāvighātaḥ/ vṛttāv upasarjanibhūtena svārthena pradhānārthasya upakārāt svaviśeṣaṇapratipattau sāmārthyahāniḥ/
- (43) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 329, b, l.9): svārthaviśeṣyatvarūpāmśasya tyāgena tathā vyavahāra iti bhāvah/
- (44) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 329, b, ll.10-12): paropakārāya iti/ parasya puruṣāder itarasambandhavyavacchedarūpopakārāya ity arthaḥ/
- (45) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 329, b, ll.14-19): bhāṣye na ca ayam arthaḥ parārthavirodhī iti/ rājapadena parārthasya puruṣarūpārthasya āskandane tadviśeṣaṇatvena rājarūpārthopasthitau rājarūpo' rthaḥ svato na virodhī, kiṃ tu svagataṃ viśeṣyatvam eva virodhi, atas tan na hāsyati, kiṃ tu svagataṃ viśeṣyatvam eva virodhibhūtaṃ tyajati ity arthas tad dhvanayan vyācaṣṭe viśeṣaṇaṃ nāma iti/ anyathā viśeṣaṇaviśiṣṭapurūṣopasthitir na syād iti bhāvah/
この従属要素の役割は、差異化・関連付けによるアスペクト把握にも関係すると言えるであろう。
- (46) PP on VSk. 95 (p. 199, l.9): svaprādhānyam eva svasya hīyata iti jahatsvārthā vṛttiḥ/
- (47) VP. VSk. 96 (VP (1) では97) cd: vikalpābhyuccayābhyāṃ vā bhedasamsargakalpanā//
- (48) MBh on P2.1.1 (p. 330, a, ll.27-29): atha vā samarthādhikāro' yaṃ vṛttau kriyate/ sāmārthyam nāma bhedaḥ, saṃsargo vā/ apara āha bhedasamsargau vā sāmārthyam iti/
- (49) 文章の意味論としての「差異化・関連付け」に関しては、小川 [1991], 川上 [1994] を参照した。
- (50) PP on VSk. 96 (p. 199, l.26-p. 200, l.2): vākyaprakṛtitvaṃ vṛttipadasya manyamānā vākyagatabhedasamsargakalpanām atra kurvanti/ tathā hi bhedo vākyārthaḥ saṃsargo vā iti vikalpaḥ/ dvāv api iti abhyuccayaḥ/ samuccayaḥ/
- (51) MBh on P2.1.1 (p. 330, a, ll.29-35): kaḥ punar bhedaḥ saṃsargo vā? iha rājña ity ukte sarvaṃ svaṃ prasaktam, puruṣa ity ukte sarvaḥ svāmī prasaktaḥ/ iha idānīm rājapuruṣam ānaya ity ukte rājā puruṣam nivartayaty anyebhyaḥ

svāmibhyaḥ, puruṣo' pi rājānam anyebhyaḥ svebhyaḥ/ evam etasminn ubhayato vyavacchinne yadi svārthaṃ jahāti kāmaṃ jahātu na jātucit puruṣamātrasya ānayanam bhaviṣyati/

- (52) PP on VSk. 96 (p. 200, ll.2-6): tatra puruṣaśabdasya bhṛtyavācitive svāmīnaḥ sāmānyena avagatau rājaśabdaḥ svāmiviśeṣebhyo vyāvṛttiṃ pratipādayati iti bhedo vākyaṛthaḥ/ anumīyamānās ca atra saṃsargaḥ/ yadā tu jātivācī puruṣaśabdā tadā rājaśabdād viśiṣṭena arthena etadarthasya samanvayo' vagamyata iti saṃsargo vākyaṛthaḥ/ viśiṣṭatvāc ca saṃsargasya arthāntarād bhedo' numīyamānaḥ/
- (53) Pradīpa on MBh on P2.1.1 (p. 330, a, ll.36-40): vṛttau kriyata iti/ yadi ca vṛttau bhedasamsargau na syātām tadā sāmartyam eva na syāt tadātmakatvāt sāmartyasya ity arthaḥ/ tatra bhedaḥ saṃsargāvinābhāvītvād anumīyamānasamsargaḥ sāmartyam, saṃsargo vā bhedāvinābhāvī anumeyabhedah/ ubhau vā yaugapadyena āśriyamāṇau sāmartyam ity arthaḥ/
- (54) Pradīpa on MBh on P2.1.1 (p. 330, a, l.40-p. 330, b, l.3): sarvaṃ svam iti/ rājāna ity aśṣṭhyā saṃbandhimātrasya ākṣepāt/ sarvaḥ svāmī iti/ yadā puruṣasya pāratantryaṃ pramāṇāntareṇa pratipannaṃ tadapekṣayā etad ucyate/ anyathā puruṣa ity ukte' sti iti pratītiḥ syāt, na tu svāmimātrāpekṣah/
- (55) Pradīpa on MBh on P2.1.1 (p. 330, b, ll.3-6): tatra bhedapakṣe rājā puruṣam svāmīyantarebhyo nivartya svārthaṃ jahāti/ puruṣas tv ajahad api svārthaṃ svāntarebhyo rājānam nivartayati iti/ tatas ca kṛtakāryasya bhavatu rājārthasya nivṛtīḥ/ akṛtakāryasya nivṛttau vṛttir eva na syāt/ evaṃ saṃsarge' pi joyyam/
- (56) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 330, b, ll.11-13): anvayād iti pakṣe puruṣapadaṃ rajasambandhavatpuruṣatvena upasthāpakam/ iha tu puruṣapadāt puruṣatvena eva puruṣaviśeṣopasthitir iti bhedaḥ/ VSLM (p. 1401, l.15-p. 1402, l.4): tathāhi vṛttau rājapadasamnidhānāt puruṣapadena eva rajasambandhavatī rājānyasvāmīsambandhābhāvavati ca yā puruṣavyaktiḥ sā upasthāpayate/
- (57) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 329, b, l.38): viśeṣaṇam viśeṣakaḥ itaravyāvarttaka ity arthaḥ/
- (58) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 330, ll.37-41): yathā viśeṣaṇatvena ananvito' pi puruṣo rājānam svāntarebhyo nivarttayati, evaṃ rājā viśeṣaṇatvena ananvita eva puruṣam svāmīyantarebhyo nivarttayīṣyati iti bhāvaḥ/ bhavatu rājārthasya iti/ dyotakatāmātreṇa cāritārthyād rājapadāt tadanupasthitir eva nivṛttir ity arthaḥ/
- (59) ナーゲーシャは VSLM において、VP2.464 (VP(3). VP(1) では2.469) ab における「言葉の差異化・関連付けという表意力、これら二つは範囲が定まっている」というバルトリハリの見解を引用し、差異化によって文中の語の個々の意味が、関連付けによって文単一の意味が知覚されるとしている。つまり、註(2)で

挙げたような文の意味のあり方には、差異化・関連付けの双方が関わっているのである。cf. VSLM (p. 1405, ll. 10-13): hari api bhedasamsargaśakti dve śabdasya ete vyavasthite/ iti/ bhedaśakti yā pṛthagbhānam samsargaśakti yā ekabhānam iti tadarthah/ ただし、ここに引用されている VP のテキストは、VP (1), VP (3) の “bhedasamsargaśakti dve śabdād bhinne iva sthite” とは異なる。

- (60) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 330, b, ll. 19-23): tatra bheda iti/ svatvasa-mānādhikaraṇo rājabhinnasvāmikabhedo rājasamsargavyāpyah/ evaṃ vṛtтыupasthā-pyarājasambandhavadvyaktigatarājasambandho rājabhinnasvāmikabhedavyāpya iti bhāvah/ evaṃ ca bhedavadvyaktibodhe sā rājasamsargavaty api iti tadvatī vyaktir api buddā eva/
- (61) Uddyota on MBh on P2.1.1 (p. 331, a, ll. 6-11): kiṃ ca anyebhyaḥ svāmibhyo nivartayati *¹ ity anena anyasvāmisaṃbandhanivṛttam puruṣaṃ bodhaviṣayīkaroti ity arthakena bhedaḍeḥ śābdabodhaviṣayatvaṃ sūcayati/ puruṣo*² rājānam anyebhya iti drṣṭāntārtham/ ito' pi tayor bodhaviṣayatvaṃ bodhyam/*¹MBh (2) (p. 330, a, ll. 32) では nivartayaty anyebhyaḥ svāmibhyaḥ. *²MBh (2) (p. 330, a, ll. 32f) では puruṣo' pi.
- (62) 見てきた通り、カイヤタはヘーララージャの発展的継承者とは言い難い。文と統合形の関係を常に明言した上で議論を展開する点、そして、限定・被限定関係を一方的な方向のみから捉えていない点など、ヘーララージャとナーゲーシャの間の共通点は多い。しかし、註(15)でも述べたように、PP と Mahābhāṣyadīpikā, Pradīpa と Mahābhāṣyadīpikā の関係を確認できない以上、このことを断言することはできない。
- (63) 後期文法家が言語認識を論じる際に多用する「想起 (upasthiti)」という概念からもこのことをうかがうことができるのではないか。本稿で扱った部分の Uddyota においては、想起させるもの (upasthāna, upasthāpaka, upasthāpayati, upasthāpyate) としての言葉やその意味については触れられるが、人間があるものを想起する (upatiṣṭhati) という表現は見られないのである。